

1. 幕政改革に関する以下の文を読み、空所に入る適当な語句を記入しなさい。解答番号は[1]～[38]

7代将軍家継の死後、紀伊藩主であった（ [1] ）が、8代将軍となった。彼は側用人をおかず、有能な人材をつぎつぎに登用して、改革に取り組んだ（享保の改革）。改革の中心は財政再建であり、大名から石高1万石ごとに米100石を上納させる（ [2] ）を実施し、見返りとして参勤交代の負担を緩和した。また、農政では耕地拡大をはかるとともに、検見法を（ [3] ）に改めて、年貢増徴をめざした。行政改革では、奉行所の訴訟実務を軽減するため、金銭関係の訴訟を受理しない（ [4] ）を発した。また、消火制度を整備するために町火消を組織させたり、評定所の門前に（ [5] ）を設置し、その投書により小石川養生所を建てたりした。庶民の基本法典である（ [6] ）を編纂して法治主義を強化したのも、行政改革の一環である。

しかし、改革のすべてが成功したわけではない。17世紀後半、村民の利害を代表する村役人層が、領主に直訴する（ [7] ）一揆がみられるようになり、下総の佐倉惣五郎は義民として伝説化された。17世紀末以降になると、広範囲にわたる（ [8] ）一揆が一般化した。その反面、村役人層の不当な行為に対する（ [9] ）も増加した。享保の飢饉の翌年には、米価高騰に怒る民衆によって、江戸で最初の（ [10] ）が発生した。

この状況下で18世紀後半に幕政を主導したのは、10代将軍徳川家治の側用人から老中となった（ [11] ）である。[11]は株仲間を広く公認し、営業税である（ [12] ）や冥加の増収など、積極的な商業・経済政策を展開した。工藤平助の提言を受けて、（ [13] ）らを蝦夷地に派遣し、その開発やロシア人との交易の可能性を探った。しかし、天明の飢饉が拡大する中で、将軍家治が死去すると、[11]は老中を辞任することになった。

（中略）

1787年、11代将軍（ [19] ）のもとで老中首座になった（ [20] ）は、寛政の改革に着手した。百姓の出稼ぎを制限し、各地の社倉・義倉に米を蓄えさせる（ [21] ）を整備して、飢饉に備えさせるとともに、困窮した旗本・御家人を救済するべく、（ [22] ）を発して札差に貸金を放棄させた。都市政策にも力を入れ、正業をもたない者に資金を与えて帰農を奨励する（ [23] ）を出す一方、町入用の節約分の7割を積み立てさせ、窮民対策にあてる（ [24] ）を開始した。文教政策では朱子学を正学とする（ [25] ）を発令し、民間に対してもきびしい出版統制をおこなったため、民衆の反発を招く結果になった。

[20]の解決すべき課題として、外国からの危機への対応もあった。1792年、ロシア使節ラクスマンが根室に来航し、1804年にはロシア使節レザノフが長崎に来航した。その後も外国船が日本近海に出没したため、幕府は1825年、異国船打払令を発して外国船の撃退を諸藩に命じた。

尊号一件などを理由に[20]が老中を退いたのち、11代将軍[19]は徳川家慶に将軍職を譲ったあとも、文化・文政期を中心に（ [26] ）として実権を握り続けた。この時期には、品位の劣る小判が大量に発行され商人の経済活動が活発となったが、一方で江戸周辺の治安が悪化したため、幕府は1805年に（ [27] ）を設置して、取締りを強化した。天保期に入ると、全国的な飢饉によって農村や都市に困窮した人びとがあふれるようになった。1837年、飢饉に対する大坂町奉行の対応を批判して、陽明学者の（ [28] ）が挙兵する事件がおこり、幕府に衝撃を与えた。このような国内問題に加え、天保期には（ [29] ）事件などの対外問題も続いた。[29]事件に関して、（ [30] ）は『慎機論』を、（ [31] ）は『戊戌夢物語』を著して幕府の対外政策を批判した。

このような内外の問題に対して、老中（ [32] ）は天保の改革を実施した。江戸に流入した貧民を強制的に帰農させる（ [33] ）を出して農村の再建をはかり、（ [34] ）の解散を命じて物価を引下げようとしたが、効果はあがらなかった。さらに、江戸・大坂周辺の私領を直轄地とするため、1843年に（ [35] ）が発せられたが、大名・旗本や領民の反対が強く、結局、撤回された。天保の改革の失敗は、幕府権力の衰退を示すものであった。

このころ、諸大名も中・下級武士の有能な人材に登用するなどして、藩政改革をおこなった。・摩藩の（ [36] ）は、黒砂糖の専売を強化するなどして財政再建を実現した。長州藩では、（ [37] ）が多額の借金を整理し、下関に入港する船を相手に委託販売などを実施した。佐賀藩でも、藩主（ [38] ）が均田制を実施し、本百姓体制の再建をはかった。改革に成功した・長土肥などの諸藩は、雄藩として幕末の政局に強い発言力をもって登場することになる。